

王先謙注に見える「諸詮賦」について

——「諸詮賦傑音初綺反」(『漢書補註』一四二ページ一二行)——

高 芝 麻 子

【おおよその解釈】

本文「柴虎參差」の「柴」の文字の音注に、王先謙は「官本引蕭該音義曰、柴一本作傑。諸詮賦、傑音初綺反。(官本引く蕭該音義に曰く、柴は一本傑に作る。諸詮賦、傑音は初綺反。)」としている。この「諸詮賦」について検討する。

【校勘】

異同なし。

【旧注・旧説の整理】

なし。

【問題提起】

王先謙の引く「蕭該音義」の誤りを正すとともに、「諸詮賦」の意味を検討したい。

【用例・考察】

王先謙が『漢書補註』の校訂に用いた『官本』とは、乾隆四年（一七三九年）に勅を受けて作られた『漢書』を言う。その『官本』に引かれた「蕭該音義」の中に、問題の「諸詮賦」の語が見える。「蕭該音義」とは、隋の蕭該が書いた『漢書』の音義に関する書籍であり、正式には『漢書音義』と言う。本文はすでに散逸しており、現在見られる佚文を輯めたものに、拜經堂叢書所収の蕭該『漢書音義』がある（以下拜經堂版）。拜經堂叢書は清の臧琳、臧庸によって編まれた叢書で、『漢書音義』は嘉慶四年（一七九九年）刊行とされる。すなわち、王先謙が参照した『官本』版の「蕭該音義」は、拜經堂版とは異なるテキストと考えられる。

王先謙の引く「蕭該音義」（以下、王先謙版）と拜經堂版はほぼ同文であるが、「柴」の項については一カ所だけ文字の逆転が見られる。

王先謙版：柴一本作傑諸詮賦傑音初綺反

拜經堂版：柴一本作傑諸詮賦音傑初綺反

すなわち、王先謙の文では「諸詮賦、傑の音は初綺の反」と訓じて「諸詮賦」を一語とせざるを得ないが、拜經堂版では「諸詮賦音、傑は初綺の反」と訓じ、「諸詮賦音」の四字で読む可能性が考えられるのである。

実際、拜經堂版には、「諸詮賦音」の四字がたびたび見られる。⁽¹⁾ また「諸詮云々」「諸詮曰々」「諸詮作々」「諸詮々」などと略称されていることも多い。⁽²⁾ これらの用例が見えるのは、管見の限り、『漢書』に引かれた賦への音注である。そのため、「諸詮賦音」は賦の音注をまとめた書の名であろうと推測される。

「諸詮賦」もしくは「諸詮賦音」という書物は『隋書・經籍志』には見られない。しかし『隋書・經籍志』卷三五には『二都賦音』一卷（李軌撰）、『百賦音』十卷（宋御史褚詮之撰）が当時見られ、梁には『賦音』二卷（郭徵之撰）があつたが、隋までに散逸したとある。これら「賦音」と題している書物は、賦に音注を施したものである。現存する断片から推測するに、賦の音注本であると考えられる「諸詮賦音」は、恐らく同様の「賦音」の書であろう。そうであれば「蕭該音義」の文言は、王先謙版の「諸詮賦」ではなく、拜經堂版に見えるように「諸詮賦音」の語順が正しいと考えられる。⁽³⁾

先に引いた通り、「諸詮賦音」は「諸詮」とも略されている。これは蕭該『漢書音義』が「蕭該音義」と略され、時には「蕭該」と略されることから推察するに、「諸詮」が作者名であると考えられる。また、隋の蕭該がたびたび参照していることから、隋代に存在した書物であることは確かであろう。そこから、『隋書・經籍志』に見える褚詮之『百賦音』十卷に何らかの誤写なり忌諱なりが加わって、現存する佚文中では「諸詮賦音」と表記されている可能性を指摘しておきたい。

【結論】

王先謙が「柴」への音注として引く「蕭該音義」には語順の混乱が見られる。そこで「諸詮賦」とされているものは、

本来「諸詮賦音」とすべきものである。「諸詮賦音」は書名と考えられ、褚詮之『百賦音』十巻を指す可能性もある。

注

- (1) たとえば「諸詮賦音苦啣反」「穆諸詮賦音株」など。〔漢書音義〕巻中「揚雄傳」卷五十七)
- (2) たとえば「諸詮云齊汨諧反」「諸詮作覓遡覓呼盛反」「諸詮登張萌反」など。(同右)
- (3) 王先謙が引く「音義」には「諸詮賦音苦啣反」など、「諸詮賦音」の形で引かれている句も見え、拜經堂版と一致する条も多い。